

令和7年度

研究集録

— 第53卷 —

令和7年3月

岩手県高等学校教育研究会
特別支援教育部会

目 次

【各校実践要旨】

| | |
|-------------------|----|
| 岩手県立盛岡視覚支援学校 | 1 |
| 岩手県立盛岡聴覚支援学校 | 2 |
| 岩手県立盛岡となん支援学校 | 3 |
| 岩手県立盛岡青松支援学校 | 4 |
| 岩手県立盛岡峰南高等支援学校 | 5 |
| 岩手県立盛岡みたけ支援学校 | 6 |
| 岩手県立盛岡みたけ支援学校奥中山校 | 7 |
| 岩手県立盛岡ひがし支援学校 | 8 |
| 岩手県立花巻清風支援学校 | 9 |
| 岩手県立前沢明峰支援学校 | 10 |
| 岩手県立一関清明支援学校 | 11 |
| 岩手県立気仙光陵支援学校 | 12 |
| 岩手県立釜石祥雲支援学校 | 13 |
| 岩手県立宮古恵風支援学校 | 14 |
| 岩手県立久慈拓陽支援学校 | 15 |
| 岩手大学教育学部附属特別支援学校 | 16 |
| 学校法人カナン学園 三愛学舎 | 17 |

【規 約】

| | |
|----------------------|-------|
| 岩手県高等学校教育研究会 | 18～20 |
| 岩手県高等学校教育研究会特別支援教育部会 | 21 |

岩手県立盛岡視覚支援学校

研究テーマ

「一人一人に応じた、わかる授業・わかる支援の充実を目指して～視覚障がい教育の専門性を生かして～」

(3年研究 1年次)

1 全体研究

(1) 研究目的

① 児童生徒のアセスメントや、各教科等のねらいについての理解を深め、これまでに培ってきた視覚障がい教育の専門性を活用しながら、一人一人が「わかる」と感じることできる授業・支援を実践する。

② 授業・支援を通して、本校における「視覚障がい教育の視点」を探っていく。

(2) 研究方法

東北盲学校教育研究会分科会に合わせてアンケートを基に3年間固定の研究グループを5つ編成し、グループごとに毎月研究会を行う。対象教科のねらいを理解するためにアセスメントを行い、授業略案の共有や研究会を通して授業改善を図り、本校の視覚障がい教育の視点を探求する。

(3) 研究内容

「自立活動目標設定シート」を用いて児童生徒のアセスメントを行い、学習指導要領等に基づき各教科のねらいや育成する資質・能力を理解する。一人1授業を目標として実践に取り組み、グループ内で共有して学びを深める。

(4) 研究実践

以下の5グループで研究を進めた。実践をもとに、本校の視覚障がい教育の視点に基づくチェックリストを作成し、授業づくりの視点チェックリストや寄宿舎支援力の視点チェックリストの作成に向けて取り組んだ。各グループの実践を以下にまとめる。

① 教科指導1グループ(文系、音楽、美術)

6つの授業を通して、教材提示や機器活用、1対1授業での対話的な活動など、授業づくりの基盤となる視点を確認した。

② 教科指導2グループ(理系、体育、技術家庭科)

4つの授業を通して、児童生徒の立場で考える姿勢、視覚補助具の活用や体験の重視など授業づくりの視点を確認できた。

③ 重複障がいに対する指導グループ

3つの授業を通して、教材提示や視覚情報の調整など、指導支援の具体的工夫が共有され、アセスメントの視点も広がった。

④ 理療科グループ

7つの授業を通して、PCスキルの習得により情報アクセスや課題解決、コミュニケーション力が向上するという成果を得られた。

⑤ 寄宿舎グループ

QOL検討会や職員研修会を通して、生活面・食事面・歩行面など多方面から児童生徒の支援方法を見直し、職員間で支援の方向性を揃えるための基盤づくりが進んだ。

2 講演会(高教研講演会)

演 題：視覚障がいのある児童生徒の学習環境づくり

～UDブラウザなどICT活用をとおして～

講 師：慶應義塾大学 教授 中野 泰志氏

期 日：令和7年7月28日

参加者：63名

3 研修会

(1) 研修報告会

外部団体の研修会の内容を全職員で共有する場を3回設定した。

(2) 研修会の実施

(例 職員研修会など)

4 他の教育研究機関との連携

(1) 全日本盲学校教育研究会東京大会
(7月31日・8月1日)

(2) 東北盲学校教育研究会宮城大会及び東北・北海道理療科教育研究会宮城大会
(11月6日・7日 オンライン開催)

5 刊行物

研究収録としては刊行しないが、CDにまとめ、閲覧できるようにする。

岩手県立盛岡聴覚支援学校

研究テーマ

「子ども一人一人の主体的・対話的で深い学びの実現に向けて—自立活動の実践を通して—」

(2年次研究の2年目)

1 全体研究

(1) 研究の目的

子ども一人一人の主体的・対話的で深い学びを実現するための自立活動の指導の在り方を明らかにする。

(2) 研究の内容と方法

- ① 共通主題及び昨年度までの研究成果と課題を受けて、各学部で子どもの実態に即した研究主題を設定して取り組む。
- ② 各学部で「主体的・対話的で深い学び」について確認する。
- ③ 各学部で「自立活動」の内容の確認をする(特別支援学校学習指導要領、聴覚障害教育の手引き、平成29年度盛岡聴覚支援学校研究成果物「話し方・聞き方に関する指導段階表」、自立活動指導資料(聴覚障がい)等を参考にする)。
- ④ 実態把握や子ども理解を深め、指導内容を選定する。
- ⑤ 授業研究、事例研究等を通し、研究主題に迫るための研究実践を進める。実践後、学習評価や指導の評価を通し、授業改善に取り組む。
- ⑥ 寄宿舎については、各学部の実践と同様に自立活動の内容を確認し、個別の支援計画と連動した取組を行う。

(3) 今年度の実践

- ① 全校研究会
5月：全校研究テーマ、各学部の研究について
2月：次研究のまとめ
- ② 学部研究会(11回)
各学部でテーマを設定した研究会
- ③ 全校授業研究会
高等部：自立活動
「災害が起きた時、どうする?!」

2 各学部研究

(1) 幼稚部

「活動に興味をもち自ら遊びを広げるための環境構成の在り方」

- ① 個別の指導計画の目標の共有
- ② 幼児の人やものとの関わりの実態と目指す姿の共通理解
- ③ 目指す姿を目標にした環境構成、支援の方法の検討
- ④ エピソード記録に基づいた活動内容及び環境

(2) 小学部

「児童一人一人の意欲を引き出すための授業実践」

- ① 生活言語の確実な定着を目指す自立活動の教材研究
- ② PDCAサイクルを意識した自立活動の授業実践
- ③ 各教科等の下支えに自立活動の指導を置き、教科横断的な学びを意図した、児童一人一人の意欲を引き出す授業実践の検討

(3) 高等部

「対話を通して個々の考えを深め、言語表現の幅を広げる支援の在り方—社会参加を目指した自己の障がい認識を深めるディスカッション—」

- ① 高等部自立活動(全体)の計画と内容の工夫
- ② 対話場面の設定と、考えを深める支援の検討と評価

(4) 寄宿舎

「一人一人の主体的な生活の実現に向けて—個別の支援計画の共有と指導実践の取組—」

- ① 職員間の情報共有の方法
- ② 寄宿舎生・職員共に振り返りの充実
- ③ 棟(岩手棟・姫神棟)の取組を全体で共有

3 研究のまとめ

2年間を通して、子ども一人一人が主体的に取り組む様子、自分の考えを発信する様子が見られるようになり、自立活動における主体的・対話的で深い学びとは何かについて検討することができた。しかし、対話の場における学びを自立活動の視点で捉えると、その指導内容が適切であるか、今後も検討していく必要があると考える。

4 講演会

演題：「主体的・対話的で深い学びの実現に向けて—聴覚障がい教育における自立活動—」

講師：宮城教育大学 松崎 丈 教授

期日：令和7年8月4日(月)

参加者：65名

5 他の研究機関との連携

- (1) 全日本聾教育研究会長崎大会
- (2) 東北聾教育研究会青森大会
- (3) 岩手県きこえ・ことば・LD等教育研究会

岩手県立盛岡となん支援学校

研究・研修テーマ

「学習指導要領に基づいた授業実践の充実を目指した取組」

1 校内研究

(1) 今年度の取組について

学校体制の中でカリキュラム・マネジメントサイクルの構築3年計画の2年目となる。昨年度に引き続き、教務部や自立活動部と連携しながら学習指導要領に基づいた授業実践に必要となる研修を行うこととした。また、国語科と算数・数学科の「育成を目指す資質・能力を明確にした授業づくり」を目指して教科研究会を実施することとした。

(2) 研修・研究内容

- | | |
|-------------------------|--|
| ① 自立活動の個別の指導計画作成研修 | |
| ② 授業づくり研修(単元案の活用) | |
| ③ 年間指導計画の作成研修 | |
| ④ 教科研究会①(岩大の武部准教授による研修) | |
| ⑤ 教科研究会② | } グループ別単元構想 " 授業実践 " 振り返り 報告会・まとめ(全体) |
| ⑥ 教科研究会③ | |
| ⑦ 教科研究会④ | |
| ⑧ 教科研究会⑤ | |

(3) まとめ

前半に研修を3つ行い、各教科の育成を目指す資質・能力を明確にした授業づくりのための基礎的・基本的な内容を共通理解する場とした。

後半は教科研究会を行った。教育課程、学部ごとに5～6名程度でグルーピングをし、国語科と算数・数学科に分かれて、単元構想から授業実践、振り返りまでを行った。「育成を目指す資質・能力を明確にした授業づくり」と「観点別学習状況の評価」について一人一人が考える機会となった。

2 グループ研究

(1) 訪問あおぞら(医大小児科)

「復学支援の充実を目指して～学習支援を通して～」をテーマに、行動面につまずきの見られる児童を対象に、自立活動の個別の指導計画を作成し、授業実践を行った。対象児童に対して授業を行う4名の職員で情報を共有しながら授業改善をすることで、成果が見られた。

(2) 訪問てんくう(医大児童精神科)

「復学支援の充実を目指して～SSTを活用し

た集団学習を通して～」をテーマに、初の試みとして「てんくうタイム」を月1回実施した。

医療側のニーズで普段は個別学習中心であるが、病棟から許可を得て、コミュニケーションを学ぶ場として、効果的な支援の在り方を模索しながら授業実践を行い、児童生徒、病棟職員から高評価を得ている。次年度以降も継続していく。

(3) 寄宿舎

「寄宿舎目標の実現に向けた支援と指導の実践～系統的な支援をめざした寄宿舎活動の見直し～」をテーマに、前半は合同ミーティングについて、後半はさらに小さな集団や個に焦点を当ててアセスメントを行った。記入用紙を作成して共通理解の見える化を図ったことで、より系統的な支援に繋げることができた。

3 講演会

演 題:「特別支援学校(肢体不自由)のカリキュラム・マネジメント」

講 師:福岡教育大学

教育学部特別支援教育研究ユニット

教授 一木 薫 氏

期 日:令和7年8月1日(金)

参加者:86名

4 大会発表

(1) 演 題:「自立活動の個別の指導計画の作成と指導の実践」

発表者:教諭・齊藤 香子(小学部)

大 会:①第71回全国肢体不自由教育研究協議会
北海道大会:ポスター発表

②第63回東北地区肢体不自由教育研究大会(青森大会):実践報告

(2) 演 題:「復学支援における関係機関との連携～復学支援の充実を目指して～」

発表者:教諭・稗貫 真理子(訪問あおぞら)

大 会:第66回全国病弱虚弱教育研究連盟研究協議会(青森大会):研究発表

岩手県立盛岡青松支援学校

研究テーマ

「生活の安定と他者との関係性を育む自立活動の取り組み」(2年度研究)

1 全体研究

(1) 研究の目的

本校では、令和5年度から自立活動をテーマに事例検討を中心とした実践を積み重ねてきている。

本研究は、2年度研究の2年目である。1年度目は「生活の安定」を共通のテーマとし、3つの分科会に分かれて実践を積み重ねた。ケース検討会や全体研究会等で各グループ共通の方向性を検討し、今年度は「他者との関係性」をテーマとした。3分科会を継続させて研究を深めることとし、前年度までの成果と課題を生かして学習活動の調整・工夫について検討し、実践を積み重ねた。

(2) 各グループについて

① 生活の安定グループ

「生活の安定につなげる行動の枠組み作りとルーティンの設定」

長期入院を経て高等部に入学した生徒について、昨年度に引き続き事例研究に取り組んだ。暴力的行動や不穏な様子が見られたが、改善意欲を示したため、「頓服薬カード」を導入し、自己申告で服薬できるよう支援した。また、他者との距離感の改善を目的に、バウンダリーを意識した振り返りシートを毎日実施した。成果として、服薬の必要性をあらためて理解し、言葉で伝える力、対人関係の距離感の改善が見られた。課題は、薬に頼らず適切な行動を選択する力と他者に対する理解力の向上である。

※バウンダリー…自分と他者との間にある“心の境界線”のこと

② 意欲の向上グループ

「モチベーションの維持を目指した学習活動の工夫と指導支援」

昨年度対象としていた中学部生徒1名について、継続して事例研究を行った。Co-MaMeのアセスメントシート結果から、教育的ニーズを「自信」「多動性」「学習への意識」「注意・集中」の4観点に絞り、各項目の評価について検討した。日々の授業の様子を記録し、各教科の特性に配慮した指導・支援を繰り返し実施した。また、生徒が抱える思いに寄り添い相談することで、具体的な目標と学校生活で取り組むべきことを設定することができた。

取り組みを継続しながら、目標の見直しと再設定の時期・方法について検討していくことが今後の課題である。

③ 自己表現グループ

「卒業後の社会生活を送るために必要な自己理解と他者とのかかわりを育むための指導支援」

様々な不安要因から、問題行動に発展してしまう対象生徒について引き続き事例研究に取り組んだ。昨年度からの変化として、①高等部へ進学したこと②卒業後を考える機会が増えたことが挙げられた。合わせて、行動観察やアセスメントをもとに支援方法を検討した。不安視されていた高等部入学時は安定していたが、徐々に対人関係の問題、進路の課題などで不安定さが見られた。対象生徒の行動観察を学部全体で行うための教材開発として「行動観察カード」を作成した。教材研究を進める過程で、このカードは行動観察記録だけではなく、集めた情報を対象生徒により形でフィードバックできるという活用方法も検討された。

(3) グループ研究会

年間10回を基本に、各グループの推進状況により回数を調整し計画・実施した。

(4) ケース検討会

各分科会で、12月に実施した。本校の指導教諭、エリアコーディネーターを助言者とし、研究の経過報告と今後の指導・支援について検討した。

(5) 全体研究会(年2回)

- ① 7月：各グループの進捗状況について中間報告
- ② 2月：今年度の研究実践及び来年度の方向性についての共通理解

2 講演会

岩手県高等学校教育研究大会

演題：「子どもの脳を傷付けない子育て～マルチリトメントによる脳への影響と回復へのアプローチ」

講師：福井大学 教授 友田 明美 氏

期日：令和7年7月28日(月)

参加者：50名

3 研修会

- (1) Co-MaMe研修(全病連心身症等教育研究推進委員会オンライン研修会)
- (2) 校内研修会(病弱教育に関する動画視聴)
配信者：水野 正司 氏
(子育てwin3計画 代表)

岩手県立盛岡峰南高等支援学校

研究テーマ

『働く力』の育成を目指した授業実践等の充実
～専門教科・寄宿舎生活での取り組み～

1 全体研究

(1) 主題設定の理由

本校では、令和3年度から「働く力」の育成を目指して様々な取り組みを行ってきた。今年度も引き続き、「働く力」の育成のため、専門教科と寄宿舎生活の充実を図っていきたいと考え、実践を行うこととした。

(2) 研究の目的

生徒の「働く力」の向上を目指し、各専門教科と寄宿舎生活での指導や支援の工夫を探る。

(3) 研究の内容及び方法

① 専門教科において、各科の特徴や「働く力」の育成を目指して授業実践を行う。また、お互いの授業を参観し、意見交換を行うことで、授業改善を図っていく。

② 「働く力」についての理解を深め、授業実践の一助とするために、研修、視察、先行事例についての情報を収集する。

(4) 令和7年度の取組

① 専門教科での取組

○生活科学科互見授業（7月）

- ・クリーニング班：「ランドリー作業」
- ・縫製デザイン班：「裂き織り巾着の製作」

○農産技術科互見授業（8月）

- ・農業班、園芸班：「播種、定植準備、定植、収穫」

○加工生産科互見授業（9月）

- ・木工班：「カッティングボードの製作」（1年）
「スツールの製作」（2年）
「コレクションボックスの製作」（3年）

- ・窯業班：「粘土づくり」（1年）
「皿、小皿の製作」（2年）
「湯飲み、茶碗の製作」（3年）

○流通・サービス科互見授業（11月）

- ・清掃班：「定期清掃の基礎②」（1年）
「床清掃」（2・3年）
- ・事務班：「接客サービス」（1年）
「受託作業（保育園記録ノート製本）」、
「布張り製品」（2・3年）

② 寄宿舎での取組

- 男子棟1階：「同世代の人づきあいを想定したコミュニケーション支援の研究」
- 男子棟2階：「余暇の充実」
- 女子棟：「効果的な支援に向けた棟内の話し合いについて」

③ 産業現場等実習における就業体験での科

- 及び学年を越えた職員の協力体制について
- 後期産業現場等実習では企業の協力をいただき、1年生を対象に外部での就業体験を3日間実施した。その際に、科及び学年を越えた職員の協力体制を構築することで生徒理解が深まり、OJT及び同僚性に係る取り組みに資することができた。

2 講演会

演 題：「学校生活への不適応がみられる生徒の理解と教職員の対応について」

講 師：日本女子大学家政学部

特任教授 山本 奨 氏

期 日：令和7年8月6日(水)

参加者：69名

3 校内研修会、学校視察等

(1) 校内研修会（5月）相談支援部が開催

「発達障がいの認知（理解）とつまずきへの支援の実際」

講 師：岩手大学教育学部 准教授

鈴木 恵太 氏

(2) 全校研修報告会（12月）

(3) 校内研修会（12月）相談支援部が開催

「生徒も教師もストレスマネジメントとは」

講 師：スクールカウンセラー

佐々木 志帆子 氏

(4) 寄宿舎研修会（12月）

① 「普段のデスクワークで使える、知っておくと便利なパソコンテクニク」

② 「特別支援教育に長年携わり、教訓として記憶に残る経験談」

③ 学校視察（1月）

○市立札幌みなみの杜高等支援学校

○市立札幌豊明高等支援学校

岩手県立盛岡みたけ支援学校

研究テーマ

「児童生徒の実態に合わせた主体的・対話的で深い学びに迫る授業づくり」

～観点別評価との往還を通して～

1 全体研究

(1) 主題設定の理由

本校では、これまでの研究において「授業づくりの充実」を目指し、授業実践を中心とした研究を行ってきた。本研究では、授業づくりを主なテーマとして取り上げながら、観点別の評価を基に、授業改善を効果的に行うPDCAサイクルの過程において、【授業づくりと観点別評価の往還】と大枠で設定した。また、各学部がそれぞれの実情に応じた研究課題を設定し年間の授業実践やその際のグループワーク等による積極的な意見交換を通して、2つの課題について共通理解を深め、教職員の授業力向上、すなわち児童生徒の主体的・対話的で深い学びに資するものにした。

(2) 研究内容・方法

- ① PDCAサイクルにおける「授業づくりと学習評価の往還」という視点から、評価を活かした授業づくりに取り組む。
- ② 観点別評価について、それぞれ「何を」「どのように」評価するものか等、基本的な考え方を整理し、校内で共通理解を図る。

(3) 全校研究会・授業研究会

年間で2回の全校研究会を行い、研究テーマや方針を確認しつつ、各学部研究の方向性や授業実践等を全体で共有した。

また、全校授業研究会の開催にあたっては、中学部の作業学習の授業を参観（授業動画視聴含む）し、全教職員を8グループに分けてグループ協議を行い、生徒の実態に合わせた授業づくりや学習評価等について協議を深めた。

2 各学部研究

(1) 小学部：生活単元学習

- ① 3年「オリジナルかるたをつくろう」
- ② 4年「プラネタリウムにしょうたいしよう」
- ③ 2年「あさがおの花びら染めをしよう」
- ④ 6年「食べ物について考えよう」

- ⑤ 2年「えほんだいすき せんろはつづく」

(2) 中学部：作業学習 1～3年

- ① 木工班「製品販売会に向けて製品を作ろう」
- ② 陶芸班「販売会に向けて」
- ③ 生産班「製品販売会に向けて準備をしよう」

(3) 高等部：作業学習 1～3年

- ① 紙工班「製品販売会で販売しよう」
- ② 木工班「製品販売会で販売しよう」
- ③ 農耕園芸班「収穫した野菜の販売と調理活動に取り組もう」

3 講演会

演 題:「学習指導要領に基づいた年間指導計画の作成と授業及び評価について」

講 師: 国立特別支援教育総合研究所
情報・支援部上席総括研究員
丹野 哲也氏

期 日: 令和7年8月1日(金)

参加者: 60名

4 研修会

(1) 教科情報交換会

8月、1月に実施。日常生活の指導、音楽、体育、生活単元学習、作業学習の5つの教科等において、各学部の授業実践を見合い、情報交換を行った。他学部の授業の様子を知り、学部間の系統性について考える一助となった。

(2) 職員研修の日

令和7年8月4日(月)

特別支援教育に携わる教職員としての見識や専門性を高めることを目的とし、福祉施設等での見学を行い、就労福祉サービスの実情や卒業後の生徒の就労先について知ることができた。

岩手県立盛岡みたけ支援学校奥中山校

研究テーマ

「児童生徒の主体的な学びを育む授業づくり」
～単元配列表等を活用した授業実践を通して～
(2年次研究の2年目)

1 校内研究

(1) 研究主題について

昨年度の研究において、各教科の年間指導計画に基づいて単元の配列や各教科との関連を確認しやすいう、「単元配列表」の作成に取り組んだ。また、教科等を合わせた指導においては「各教科等関連表」を作成し、各単元においてどの教科のどんな指導内容について取り扱っているかを確かめることができた。今年度の研究では、昨年度作成した「単元配列表」や「各教科等関連表」を活用した授業実践を通して、児童生徒の主体的な学びを育む授業づくりを目指した。

(2) 研究の目的

単元配列表や各教科関連表を活用しながら、年間を通じて系統立てた指導内容の設定や教科間のつながりについて検討することで、児童生徒の主体的な学びを育む授業づくりを目指す。

(3) 研究の方法 (内容)

- ① 各学部における児童生徒の主体的な学びについて整理し、共有する。
- ② 互見授業を通して単元配列や教科間のつながり、主体的な学びの視点で検討する。
- ③ 今年度の年間指導計画に基づいた「単元配列表」「各教科等関連表」を作成し、授業実践を通して指導時期、指導内容、配列などを見直す。
- ④ 「単元配列表」「各教科等関連表」の活用と検討を通して、今後の年間指導計画の改善につなげる。

(4) 研究の実際

- ① 「主体的な学び」についての共通理解
各学部において、「主体的な学び」とはどのように学んでいる姿なのか、改めて整理して確認し、共通理解を図った。

② 一人一授業提案による互見授業

小学部：生活単元学習「修学旅行に行こう」

図画工作「トントンくぎ打ち名人」

音楽「楽しく表現しよう」

自立活動「秋をかんじよう」

中学部：生活単元学習「宿泊学習へ行こう」

生活単元学習「交流文化祭を成功させよう」

生活単元学習「身近な英語を覚えよう」

保健体育「風船バレー」

美術「クリスマス飾ろう」

アンケートや学部研究会により主体的な学びの視点や単元配列表に基づいた各教科等とのつながりなどの視点で検討をした。

③ 全校研究授業及び授業研究会

中学部：作業学習「製品販売会・作業体験会を成功させよう」

3つのグループに分かれて協議をし、互いに発表し合うことで全体として成果や課題について共有した。

(5) 研究のまとめ

今年度は授業実践を中心に研究を進めるため、一人1授業を受け持ち、互見授業を行った。互いに授業を見合うことで、客観的に授業を振り返り、「主体的な学び」の視点で、指導・支援のあり方を具体的に見直すことができた。また、「単元配列表」や「各教科等関連表」を活用することで、他教科等との関連や年間の単元構成について一覧として確認することができ、授業計画や改善に役立てることができた。今回の研究の成果を生かし、今後も継続的・発展的に活用していきたい。

2 講演会

演 題：「主体的な学びを育む授業づくり」

講 師：岩手大学教育学部特別支援教育科

准教授 鈴木 恵太 氏

期 日：令和7年7月28日

岩手県立盛岡ひがし支援学校

研究テーマ

「日常の授業づくり」及び「日常の事例の検討」による
学校教育目標を見据えた学部目標の追求

(R6～R9)

～「授業の参観」及び「授業ライブラリー」の作成と活用を通して～

1 校内研究

(1) 研究の目的

教師が主体的に取り組む「日常の授業づくり等」により、学校教育目標「児童生徒一人一人の可能性を伸ばし、心豊かで主体的に生きる人を育成する」を見据えた各学部目標を児童生徒一人一人の中に追求する。

(2) 研究の内容

学級、学年、グループ等において、「日常の授業づくり等」を必要に応じて関わる職員で行う。

(3) 研究の方法

- ① 校内研究に関わる会議は、既存の職員会議、学部会、学年会等を活用する。
- ② 「日常の授業づくり等」に以下の資料を活用する。
 - ・ 各教科の内容のまとめりごとの評価規準
 - ・ ひがし通信R4・R5（学習指導要領の基本的考え方についてまとめた資料）
- ③ 教員同士の希望に応じた授業参観を実施し、自身の授業改善に生かす。
- ④ 授業映像記録「授業ライブラリー」の運用
 - ・ 学校フォルダ内に、校内研究の取り組みの成果である「日常の授業」の映像データ（可能な場合、指導略案を添える）を提供する。
 - ・ 必要に応じて視聴し授業改善に生かす。
- ⑤ 周知・報告は、岩手県高等学校教育研究会特別支援教育部会研究集録による。

(4) 今年度の実践

4年次研究の2年次にあたる今年度も「日常の授業づくり」に焦点をあて、既存の会議等を活用しながら授業改善を進めている。「授業ライブラリー」への授業映像提供の取組は定着してきた(R6年度74本)が、提供される教科、授業の形態に偏りがみられていた。今年度は学校全体でバランス良く様々な授業の改善を行うことができるよう、映像提供する授業（授業改善に取り組む授業）を予め割り振ることとした。

このことで、教師が見通しと責任をもちながら校内研究に取り組むことができている。また、授

業改善のために、他学部や他学年の授業の工夫点を参考にする機会の確保に努めている。今年度から「参観依頼カード」一枚を提出することで気軽に授業を参観し合える体制が整い、参観機会が増加している。

これらの成果となる「授業ライブラリー」は、下記のとおり分類し、必要に応じて誰でも参照することができるものとしている。今年度の授業映像提供数は、現在35本である。

| | |
|---------------|-----------------|
| ア 教科による指導 | 01 国語 |
| | 02 算数・数学 |
| | 03 音楽 |
| | 04 図画工作・美術 |
| | 05 体育・保健体育 |
| イ 教科以外の指導 | 06 自立活動 |
| | 07 総合的学習（探究）の時間 |
| | 08 その他 |
| ウ 各教科等を合わせた指導 | 09 日常生活の指導 |
| | 10 遊びの指導 |
| | 11 生活単元学習 |
| | 12 作業学習 |

4年次研究の後半となる次年度を見据え、研究の方法や資料活用の方法等について職員アンケートの実施を通して改善を図り、学校教育目標を見据えた授業づくりを更に深化させていきたい。

2 講演会

演 題：障がいのある人の社会生活支援の実際

講 師：盛岡市基幹相談支援センター

盛岡広域圏障害者地域生活支援センター

所長 工藤 宏行 氏

期 日：令和7年7月30日（水）

3 研修会

演 題：発達障害の特性理解と支援

講 師：岩手大学教育学部特別支援教育科

准教授 鈴木 恵太 氏

期 日：令和7年7月31日（木）

4 刊行物

研究集録は刊行していません。

岩手県立花巻清風支援学校

研究テーマ

「児童生徒一人ひとりの自立と社会参加を目指して」～身に付けたい力を明らかにした各教科等を合わせた指導の充実～（2年次/2年研究）

1 全校研究

(1) テーマ設定の理由

令和5年度までの2年次研究（1年次は教科での取組、2年次は各教科等を合わせた指導での取組）の成果と課題を受け、本校の中心的学習活動である各教科等を合わせた指導について引き続き実践を積む必要があるというニーズから、昨年度よりこのテーマのもと授業づくりとその改善を中心に進めることとした。

(2) 主な内容

- ① 学校教育指導指針(特支)を中心とした学習会
- ② 学部ごとに具体的な目指す姿の共有
- ③ 学部ごとに単元づくり、研究授業、授業研究会の実施
- ④ できるだけ多くの職員が参観できるように研究授業の事前周知や動画保存を行う
- ⑤ 課題から改善策を導き出し、次の授業や単元などに生かすことを重視
- ⑥ 学部及び校内での情報共有

(3) 全校授業研究会

① 研究授業

期日：令和7年10月29日(水)

対象：高等部花巻清風 FLOWER COMPANY

アグリ課

単元名：秋の農業「こたままつりで野菜を販売しよう」(作業学習)

参観方法：参観及びビデオ視聴

② 授業研究会

期日：令和7年12月5日(金)

内容：全体会、グループ協議(学部縦割り)

2 各学部研究

各学部・分教室が取り組んだ学習形態及び研究授業の単元等

(1) 小学部

① 日常生活の指導

「朝の会」(4・5年2組)(2年1組)

② 生活単元学習

「トマトでアイスをつくろう」(4年1組・5年1組合同)

③ 生活単元学習

「わくわくタイム ボッチャゲームをしよう」(3学年合同)

(2) 中学部

作業学習

「じまん市②に向けて、製品を作ろう」(工芸班)

(3) 高等部

作業学習…研究授業は「1(3)全校授業研究会」のとおり。他、次年度に向けた年間指導計画の作成を実施。

(4) 遠野分教室小学部

生活単元学習(1・4・6年)

「はなせいレストランを開こう!!」

(5) 遠野分教室中学部

生活単元学習と作業学習におけるタブレット端末の活用について

(6) 北上みなみ分教室小学部

生活単元学習(1・2・3・4・6年)

「ベンチ塗装をしよう」

(7) 北上みなみ分教室中学部

作業学習

「Wリーグでのコラボ販売会を成功させよう」

3 講演会

演 題：地域との連携・協働によるキャリア発達の視点を踏まえた授業づくり—各教科等を合わせた指導をとおして—

講 師：弘前大学大学院教育学研究科教職実践専攻教授 菊地 一文 氏

期 日：令和7年8月8日(金)

外部参加者：4名

4 他の教育研究機関との連携

ステップアップⅡ研修講座「公開授業研究会」(県教委)

実施日：令和7年12月5日(金)

内 容：授業参観(ビデオ)、全校授業研究会

参加者：8名(内2名は、公開研究会参加者：中部圏域小中学校から)

5 刊行物等

令和8年度校内研究の概要と実践報告をHPにて公開予定

岩手県立前沢明峰支援学校

研究テーマ

「主体的・対話的で深い学びの実現を目指した授業実践・指導実践」(2年次研究)

1 全体研究

- (1) 研究テーマ設定の理由
- (2) 研究の内容と方法

- ① 研究の基本構想と共通理解
第1回全体研：5月 第2回全体研：2月
- ② 全体研究テーマに基づく、各学部、寄宿舎の研究計画の作成と推進
ア 各学部研究、寄宿舎研究の内容、計画立案
イ 学部研究会(毎月)、寄宿舎研究会(年8回)
- ③ 授業実践とPDCAによる授業改善の取組
ア 授業研究会の開催：年3回(各学部提案)
(ア) 各学部の研究に基づく提案授業
(イ) 研究内容や推進状況について協議
イ 授業研究会まとめ資料の作成と共有
- ④ 研究のまとめ
ア 各学部、寄宿舎の研究発表及び協議
イ 本校のホームページで公開

2 各学部・寄宿舎研究の主な内容と方法

(1) 小学部

- ① 全体研究、学部研究の共通理解
- ② 小学部における「対話的」な学びを実現するための手立て、児童の具体的な姿を検討
- ③ 流れ図の作成(各学級、学年で相談して作成)
- ④ 単元計画シートの作成(目標、手立て、評価、改善を記入)
- ⑤ 授業実践(PDCAサイクルに沿った授業改善までの実践を学団、重複学級または訪問で一単元ずつ発表)
- ⑥ 学部研究会での検討(児童の変容・支援の手立ての成果の確認)
- ⑦ 研究のまとめ

(2) 中学部

- ① 学部研究の基本構想と共通理解
- ② 学習指導要領を元にした「目標一覧表」の作成
- ③ 「学習指導要領 目標・内容の一覧表」の活用
- ④ 前期の評価の検討
- ⑤ 後期の目標の検討
- ⑥ 1分間授業動画の視聴、意見交換
- ⑦ 研究のまとめ

(3) 高等部

- ① 学部研究の基本構想と共通理解
- ② 作業学習における「主体的・対話的で深い学び」の具体化と共通理解
ア 現在実現できている「主体的・対話的で深い学び」
イ 今後実現したい「主体的・対話的で深い学び」
- ③ 作業学習における作業内容と学習指導要領の教科・内容の明確化
- ④ 作業学習における「主体的・対話的で深い学び」に着目した支援方法の構想と評価(授業づくりシートの作成)
- ⑤ 授業づくりシートのさらなる活用と改善
- ⑥ 研究のまとめ

(4) 寄宿舎

- ① 寄宿舎研究の基本構想と共通理解
- ② 舎友会活動をととして「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた取り組み
- ③ 生活指導計画組み立てシート及び実践記録シート(集団用)を活用し生徒の変容を把握
- ④ 研究のまとめ

3 講演会

演 題：「愛着障害と発達障害の理解と支援」

講 師：和歌山大学教育学部

教授 米澤好史 氏

期 日：令和7年7月29日(火)

10:00~12:15

岩手県立一関清明支援学校

研究テーマ

「児童生徒の主体性を育む支援のあり方について」

(2年次研究の2年目)

組をより効果的に進めることができた。今後も、よりよい学びにつながるよう、継続して活用・改善を進めていきたい。

1 全体研究

(1) 主題設定の理由

学校教育目標(めざす児童生徒像)である、「自分のよさに気づき、自己実現のための向上心を持ちつづける人」を育てるために、児童生徒がどのような力を発揮しているのかを具体的に見取りながら、授業実践を積み重ねていくことにより、「質の高い学び」に努めている。また、実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿として示されている「個別最適な学び」、「協働的な学び」を一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげていきたいと考える。

主体的な学びの姿を引き出し、深めることで、「人やもの、ことを意識したり関わったりし、自分の考えを広げ、深めよう」とする対話的な学びが生まれ、「もっとやってみよう」、「次は工夫してやってみよう」、「学びを他の場面で生かしてみよう」という深い学びの姿につながる。そのため、前回研究で得た成果のさらなる充実と発展を図り、児童生徒一人一人の可能性を引き出すことができるような支援方法を探っていきたい。

4障がいに対応し、5つの学び場をもつ本校は、各学部、分教室で実態に大きく違いがあり、校舎も離れていることから、互いを知り、高め合えるよう、情報共有や支援方法の共有にも継続して取り組みたいと考える。

(2) 研究目的

主体的な姿の具体的なあり方について、各学部や発達段階に応じて整理し、児童生徒の主体性を育むための支援方法のあり方の検証を行い、質の高い学びのための指導の充実を図る。

(3) 研究方針と内容

① めざす姿の整理

各学部や発達段階に応じて、めざす児童生徒の主体的な姿を整理し、共有する。

② 研究実践

独自の様式である「授業実践シート」を活用し、授業実践と授業改善を進める。

(4) 全体研究のまとめ

授業実践シートの活用が、授業のねらいや手立て、研究会での意見、改善内容、児童生徒の変容等を一体的に整理し、児童生徒の主体性を育む取

2 各学部・分教室研究テーマ

(1) 本校舎幼小中学部

児童生徒の主体性を引き出す授業づくり

(2) 本校舎高等部

社会人・職業人として自立できる実践的な知識・技能・態度を育む支援のあり方～高等部段階でのキャリア教育の視点から～

(3) 山目校舎小学部わかば学級

個々の学びを深め、集団学習や日々の生活に生かす授業づくり

(4) 山目校舎小学部なのはな学級

児童の実態と手立ての共有

(5) あすなる分教室

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な実現をめざした授業実践

(6) 千厩分教室小学部・中学部

選ぶ そして 動く～児童生徒が選択できるような環境を整える～

3 講演会

演 題: 「わかるようでわからない ちょっとわかる特別支援教育」

講 師: 平熱先生

期 日: 令和7年7月31日(木)

参加者: 186名

4 研修会

(1) 第65回全国病弱虚弱教育研究連盟研究協議会兼第4回北海道東北病連研究協議会青森大会(オンライン視聴)

(2) 第25回岩手大学教育学部附属特別支援学校学校公開

(3) 第64回岩手県特別支援教育研究大会久慈地区大会

(4) 東京学芸大学附属特別支援学校研究協議会

5 他の教育研究機関との連携

(1) 高教研講演会

岩手県病弱・虚弱教育研究会と合同開催

岩手県立気仙光陵支援学校

研究テーマ

「関心別のチームによる学び合いを通じた 教師エージェンシーの向上」

1 主題設定の理由

OECDは「生徒エージェンシー」を、変化を起こすために自ら目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力と定義し、ウェルビーイングの実現に不可欠な資質と位置づけている。これは家族や仲間、教師との相互作用を通じて育まれる「共同エージェンシー」によって形成されるため、教師自身にも主体的に学び、変化を生み出す力＝「教師エージェンシー」が求められる。また、本校では児童生徒数減少、学部間の児童生徒の実態差の拡大、職員の多忙化、研修機会の確保などの課題があり、これらに柔軟に対応するため、学部や寄宿舎を越えた関心別チームによる学び合いを通して教師エージェンシーを高める必要があった。

2 目的

(1) 研究の目的

関心別のチームによる学び合いにより教師エージェンシーが高まるか検証する。

(2) 実践の目的

各チームの課題に取り組み、授業や支援、学校課題等の改善を図る。

3 方法

(1) 教師エージェンシーについて

自己評価アンケートを4月と12月に実施し、比較した。アンケートは、教師エージェンシーを評価する15項目で構成され、各職員が5件法で回答した。

(2) チーム実践について

各学部、寄宿舎の所属に関係なく、関心や課題意識を共有するメンバーでチームを編成した。各チーム4～7名で、「体育」「性教育」「ICT/AI」「働き方改革」など計11チームが編成された。

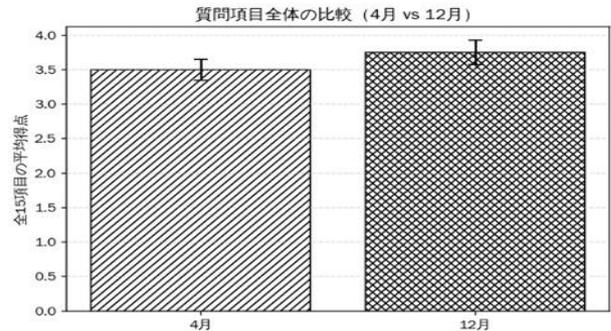
毎月の研究日に各チームで、学習会、指導案検討、教材研究、授業紹介、授業の振り返り、授業者支援会議、事例研究などを行った。

4 結果

(1) 教師エージェンシーについて

全質問の平均得点を算出し、4月と12月を比較した結果、12月は4月に比べて有意に高かった(差の平均 = +0.253、 $t(54)=2.580$ 、 $p=0.0126$ 、95%CI [0.057, 0.450]、効果量

$dz=0.348$)。効果量は小～中程度であり、全体として統計的に向上が確認された。



特に、以下の項目で有意な向上が見られた。

- ① 「ICTや新しいツールを使って、授業や支援を改善しようと努力している」
- ② 「校内研究や同僚との議論を通じて、自分の授業や支援を改善するアイデアを得ている」
- ③ 「学校全体の方針に貢献する形で、自分の意見を積極的に提案している」

(2) チーム実践について

各チームの主体的な取り組みにより、学部・寄宿舎を越えた情報共有や連携、授業・支援の改善、学習会の企画などがなされた。実践内容は、校内研究通信やdesknet's NEOなどで共有された。

5 考察

関心別チームによる学び合いは、教師エージェンシー向上にポジティブな影響を与えた。一方、効果量は中程度であり、今後はエージェンシーをさらに発揮するための仕組みづくりが課題である。

6 講演会

以下の講演会を通して、校内研究に関する概念について理解を深めた。

演 題：教師のエージェンシーとリフレクション

講 師：国立教育政策研究所 研究企画開発部
特任研究官 千々布 敏弥 氏

期 日：令和7年8月1日(金)

参加者：40名

7 その他

本研究は、日本教育公務員弘済会岩手支部より「教育研究助成事業 校内研究助成」を受けた。助成金は主にチーム実践を促進するための書籍や研修参加費に使用した。

岩手県立釜石祥雲支援学校

研究テーマ

「ICT 活用指導力の向上と情報活用能力の育成に基づく指導の充実」(2年研究1年次)

1 全体研究

(1) 研究の目的

- ① 教職員が ICT を効果的に活用して校務や指導にあたり、活用力の向上を図る
- ② 教材教具の整理・整備・共有を行い、授業の効率化を図る。
- ③ グループ研究や、全校研究会、授業見学期間などの機会に情報交換を行いながら、ICT を効果的に活用した授業を推進し、教員の資質向上を図る。

(2) 研究の内容

- ① ICT の活用について相談・共有できる環境を整備し、教職員の活用能力の向上を図る。
- ② 指導場面における ICT の活用方法についての研修会や検討会を行い、授業への共通理解を図る。
- ③ 授業づくりや教材についての情報交換を行い、授業の効率化を図る。
- ④ 学部間やグループ間の情報や課題について共有し、全校での共通理解を図る。
- ⑤ ICT の効果的な活用を視点とした授業研究会

2 1年次目(令和7年度)の計画と各グループ研究

- (1) 「教員の ICT 活用指導力チェックリスト」を基にした ICT 活用指導力と ICT 活用場面のニーズについてのアンケート調査
- (2) ICT についての相談・情報共有のためのチームの開設：チーム「ICT 相談箱」の開設
- (3) 全校研修会・ICT 講習会・グループ別研究会(「コミュニケーショングループ A・B」「感覚系」「余暇活動」「生活支援系」「プレゼン系」「教科指導系」)
- (4) 教材・教具のリンク・データベースの更新
- (5) 情報の共有：研究瓦版の発行
- (6) 授業見学期間：しゃくなげ分教室の授業を録画視聴
- (7) 全校授業研究会の実施：各グループの発表者から指導で活用した ICT の紹介と体験
- (8) 一人1レポートと、実践事例集の作成
- (9) まとめと課題

『ICT 相談箱』開設後は「参考になる情報がある」「困ったときに相談できる」ということが認知され、活用が広がった。ICT 講習会を定期的実施し、実際に体験したり、具体的な活用場面を想定したりした。結果、その後の指導に活かされた。参加できない職員のためへの伝達方法は工夫が必要である。テーマ別にグループを分けたことで、課題を共有して研究が進めやすい、少人数で話しやすくアイデアが出やすい等、有効であった。授業実践と検討を重ねるための時間が足りなかった。5月と1月のアンケートを比較すると、ICT 活用指導力が向上しているという結果となったが、難しいと感じている人も一定数いた。次年度に向けて、実践的な活用方法を啓発し、計画的に場面を設定した学校全体での取り組みを行うことで、児童生徒の情報活用能力の向上を重点に取り組んでいきたい。

3 講演会

演 題：釜石祥雲支援学校と国立釜石病院のこれまでとこれから

講 師：国立病院機構 釜石病院
名誉院長・特別参与 土肥 守 氏

期 日：令和7年8月4日(月)

参加者：65名

4 研修会

(1) 全校研修会

「ICT を活用したグループワーク (Teams、ロイロノートの活用)」

講 師：本校情報研究部員

日 時：令和7年5月27日(火)

(2) 夏季情報研修会

「GIGA スクール時代におけるセキュリティ意識の再確認」

講 師：岩手県 GIGA スクール運営支援センター

日 時：令和7年7月25日(金)

5 他の教育研究機関との連携

- 全国病弱虚弱教育連盟脳性まひ部会実践事例集
自立活動グループの実践レポート提出
- 全病連青森大会第5分科会 (PTA) 実践発表

岩手県立宮古恵風支援学校

研究テーマ

児童生徒の学びの充実を実現する授業づくり

～児童生徒が「分かる！」と感じる授業～

1 全体研究

(1) 主題設定の理由・目標

本校では、これまでの研究で児童生徒の学びが充実するような授業を目指し、「いわての授業づくり3つの視点」に基づき、「授業づくりシート」の活用と「観点別学習状況の評価」を基にした授業改善により、授業の充実を目指し取り組んできた。

本研究では、さらに学びが充実するように児童生徒の目線に立ち、全ての児童生徒が「分かる！」と感じる授業づくりができるように取り組むことにした。

(2) 研究の目標

① 全ての児童生徒が「分かる！」と感じることができる授業づくりの考え方や授業づくりの工夫について明らかにする。

② 「分かる！」と感じる授業づくりの考え方が定着し、授業の計画、実践、評価、改善に生かすようにする。

(3) 研究の目標

研究2年次の今年度は、各学部での取組を深めるとともに校内で共有するようにした。

具体的には、学部研究の情報交換会や校内授業参観を行った。

各学部の研究については以下の「2各学部研究」で述べる。

2 各学部研究

(1) 小学部

児童の目線に立って学習活動を考え、児童のかすかな変容も捉えながら授業改善していくことを目的として研究を行っている。

今年度は、体育と音楽の授業で「授業打ち合わせシート」と「授業づくりシート」を活用して、児童の実態や支援方法などを基に、指導の目指す方向や方法を共通理解して授業実践を行った。

また、それぞれの授業での児童の様子や授業づくりについて情報共有をしたことで、児童の実態を多面から捉えることができ、児童

の変容や授業の振り返りを授業改善へつなげることができた。

(2) 中学部

中学部では、生徒が「自分でできる姿」を目指し、環境や支援を整えるために、「中学部スタンダード」を作成している。

昨年度に引き続き環境整備を継続し、学習ファイルの色、日課表に使用するカード、運動会の学習に関するカード等を統一し、共有して使用できるように学部フォルダの整理をした。また、日課の提示の仕方の統一をした。

さらに、生徒が学習の目的や自分の目標が分かり、個々に必要な力を身に付けることができるように、授業づくりのキーワードをまとめたり、各教科等の学習内容について共通理解を図りながら年間指導計画の検討をしたりした。

この取組は、職員間の情報交換を活発にし、授業計画や改善につなげることができた。

(3) 高等部

高等部では、作業班ごとに異なっていた日誌や掲示物等について、指導内容を共通化できるように、統一すべき事項について検討した。話し合いを重ね、作業服の着こなしと日誌内の評価項目を統一した。

作業服の着こなしについては卒業後の働く姿を念頭に検討を行っており、卒業後の生活につなげることを目標として統一している。また、日誌の項目を統一することにより、年度で作業班が変わっても学部全体で共通して指導できるように内容を整えることができた。

この取組により、担当外の作業班について知る機会となり、学部内の共通理解を深めることができた。

3 講演会

演 題：児童生徒の学びの充実を実現する授業づくり～児童生徒が「分かる！」と感じる授業～

講 師：植草学園大学 特命教授
佐藤慎二 氏

期 日：令和7年7月28日

参加者：62名

岩手県立久慈拓陽支援学校

研究テーマ

「一人一人の可能性を伸ばす授業づくり～各教科等を合わせた指導と各教科等との『つながり』を意識した取組を通して～」(3年次研究：3年目)

1 全体研究

(1) 研究主題設定の理由

2年目の研究では、「各教科等を合わせた指導」と「各教科等」とのつながりを確認する実践研究を行った。生活単元学習及び作業学習を研究対象とし、シート等を用いて各教科とのつながりを確認しながら授業づくりを行った。児童生徒の実態を職員間で共有しながら、「各教科等を合わせた指導」と「国語・算数(数学)」とのつながりを考えながら授業づくりができた一方で、計画の段階で「教科間のつながり」を意識することや、「学年・学部間のつながり」を共有する時間がなかったことが課題として挙げられた。

このことから、3年目の研究では、「各教科等を合わせた指導」と「各教科等」とのつながりを理解し深める実践研究に引き続き取り組み、授業改善を行いながら、互見授業や全校研究会を通して「学年・学部のつながり(段階や系統性を踏まえた指導・支援)」について検討する研究を推進した。

(2) 研究の目的

一人一人の可能性を伸ばす教育活動を目指し、各教科等を合わせた指導の授業づくりの中で、学習指導要領の各教科等の指導内容を具体的に引き上げ「教科間のつながり」を検討することで、教育活動の改善を図る。さらに、学年・学部間で実践を共有し、系統的な学習活動への意識を高める。

2 研究方法

研究は主に学部ごとに推進する。「単元・題材シート」と「個別の評価シート」を使用し、学習グループごとに授業計画を立てて実践する。授業計画にあたっては、「目指す姿」や「教科間のつながり」をグループで協議し、共有する。単元・題材終了後には三観点での評価(単元・題材、個別)を検討する。研究対象の単元・題材や児童生徒はグループで設定する。教科との関連については、学部研究会において学習指導要領の内容や目標等を確認する時間を設定し授業づくりに取り入れる。

3 各学部研究

(1) 小学部

生活単元学習を対象とし、低学団は「おのおのキャンパスにいこう(2、3年生校外学習)」、高学団は「秋野菜ピザを作ろう(6年2組調理活動)」を研究対象単元として取り上げた。「教科関連シート」を活用し、関連する教科の内容を確認しながら授業づくりを行った。実践後は、単元の成果と課題について協議した。対象児童の課題については、改善策をグループ内で出し合った。また、各学団での取組と児童の変容について学部全体で共有した。

(2) 中学部

作業学習を研究対象とし、木工班と紙工班のどちらも後期校内実習を取り上げた。初めに中学部の作業学習で「目指す姿」を全体で協議し、共有した。ウェビングマップを活用し、作業学習における各教科の要素および関連する国語・数学の学習内容を確認し、授業づくりに生かした。後期校内実習の実践後は、各作業班での成果と課題、国語・数学での取組、生徒の変容について学部全体で共有した。

(3) 高等部

作業学習を研究対象とし、4班に分かれ取り組んだ。初めに「年間授業一覧表」で作業学習の年間の見通しを職員間で共有した。工芸班の単元「販売会に向けて製品を作ろう」は岩手県特別支援教育研究大会久慈地区大会の提案授業とし、本校職員以外の参加者からも多数の意見をもらった。作業内容と関連する国語・数学の内容を共有し、班内で作業内容の調整や工夫を行った。実践後は、対象生徒について作業学習の他に学級や教科の時間においてどのような姿が見られたか学部全体で共有した。

4 講演会

演 題:「子ども一人ひとりの主体性をのばす指導・支援について」

講 師: 明治学院大学 高倉 誠一 氏

期 日: 令和7年12月24日(水)

参加者: 64名

岩手大学教育学部附属特別支援学校

研究テーマ

各教科等における見方・考え方を働かせ、主体的に活動する姿を目指した授業づくり

(2年次研究の2年目)

1 校内研究

(1) テーマ設定の理由

学習指導要領や中教審答申で示された「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、教科等ならではの「見方・考え方」を働かせることが重要とされている。前次研究の課題として、各教科等の目標を捉えることの必要性和各教科等の資質・能力の評価の検討が挙げられた。

そこで今次研究では、この課題に迫るべく各教科等における見方・考え方(以下、見方・考え方とする)を働かせ、主体的に活動する姿を目指した授業づくりに取り組んでいくこととした。

(2) 研究の目的

児童生徒が各教科等における見方・考え方を働かせ、主体的に活動する姿を目指した授業づくりの在り方を明らかにする。

(3) 研究の実際(2年次)

① 育成を目指す資質・能力を視点にした実態把握と評価

全学部共通のツールとして、学習指導要領の目標、内容の一覧をベースに「実態把握シート」を作成し、児童生徒の習得状況を◎○△で評価した。それを基に目標、段階における評価規準を設定した。

② 各教科等における見方・考え方を働かせる授業づくりとその在り方についての検証

本校の実践研究の蓄積である「授業づくり」をベースに、授業づくりの中でも特に単元づくりの部分に焦点を当て、4ステップで単元構想を行い、「指導案シート」を活用して見方・考え方を意識的に取り入れた。実態把握を基にした単元の目標、評価規準の設定や単元でねらう見方・考え方の設定、それを働かせている児童生徒の具体的な姿の授業者間でのイメージの共有を行った。こういった取組から、授業づくりが変化し、児童生徒が見方・考え方を働かせる姿が見られるようになった。

③ 全校授業研究会、学校公開研究会

○全校授業研究会(7月)

各学部1回の授業研究会を行った。

今年度は、計6回の授業研究会(内3回は

○学校公開研究会(11月21日)

・小学部3・4年すみれ組 算数
単元名「くらべてみよう」

・中学部おもしろ学習3組 国語
単元名「俳句」

・高等部トライ学習2組 数学
単元名「大きな数の単位や数え方、比べ方を知ろう」

学校公開研究会には県内外の小中学校や特別支援学校等から71名の参加をいただいた。各分科会では、見方・考え方を働かせる授業づくりの在り方について活発な協議が行われた。

(4) 研究のまとめ

2年間の研究で、教科の本質や見方・考え方について考え、児童生徒が主体的に活動する姿を引き出す授業づくりを実践してきた。

共通のツールの活用や授業研究会で単元づくりの工夫について協議することを通して、単元における見方・考え方が明確化し、学習計画や学習活動の設定、発問の仕方や教材の提示等に変化が見られるようになった。その結果、授業づくりの変化、それに伴う児童生徒の変容を実感することができた。

一方で、各教科の確実な取り組みと、児童生徒一人一人の学びの連続性を確保していくための実態把握シートのさらなる活用、「見方・考え方」「深い学び」「資質・能力」の学びのサイクルを循環させること、学びを学校生活全体や社会的活用に結び付けられるよう、各教科等を関連付けた指導計画とカリキュラム・マネジメントの推進等、課題も残った。

今後も授業実践を積み重ね、児童生徒の主体的に活動する姿を目指していきたい。

2 講演会

演 題：「知っているようで知らない！
知らなかったでは済まされない！
特別な支援が必要な子どもの
進路と就労・お金の話」

講 師：中部学院大学非常勤講師
山内 康彦 氏

期 日：令和7年7月25日(金)

参加者：41名

三愛学舎

研究テーマ

教育課程編成の概念図にある「4つの力（働きかける、つながる、楽しむ、感謝する）」について理解を深め、実践的に学ぶ。

1 全体研究

(1) 研究の目的

新しい教育課程編成を目的に、2022年度に現状分析として本校の特色、強み等を確認、2023年度にコンセプトと“生徒の願う姿”、育成をめざす資質・能力を定め、2024年度には“めざす学び”を確認し、教育課程編成の検討を行った。

今年度より新しい教育課程を基に地域と連携しながら実践を進めている。その中で核となるのが4つの力である。この4つの力について職員間で共有し、理解を深め、“生徒の願う姿”や日々の取組に活かすことをめざす。

(2) 研究内容および方法

① 年度始めの確認

4つの力についての再確認、総合探究における地域のユースセンターとの連携、外部講師によるデジタル表現活動等を確認した。

② 夏季職員研修

4つの力を理解・共有することを目的に、学校生活での気づきやエピソードを挙げ、“生徒の願う姿”を日々の取組に反映させるようにした。

③ 秋季職員研修、冬季職員研修

4つの力について対話を進め、理解を深め、“生徒の願う姿”の様子を4つの力の視点で検証した。

2 研修会

(1) 高教研講演会

演題：「限りある命だからこそ、
今を、命を燃やして全力で生きる」

講師：松嶺貴幸氏（美術家）

期日：令和7年6月11日（水）

参加者：約100名

(2) 新職員研修

新職員が担当する生徒の事例検討を通して、今後の取組に活かし、モニタリングを実施した。

(3) 2年目職員研修

授業力向上を目的に異学年の授業体験と研究授業を実施した。

(4) 奥中山学園との合同研修

カナンの園関連事業体である奥中山学園（障害児入所施設）の職員と合同で実施した。

テーマ：生徒一人一人の姿から学ぶ

アセスメントと支援について

内容：障がい者地域生活支援センターしんせい所長の田代拓之氏を招き、生徒の捉え方、アセスメント、それに伴う支援について、奥中山学園の職員と共通確認することができた。

期日：令和7年7月22日（火）

(5) ワークショップ

職員が普段の業務から離れ、自然に触れ、「自分のあり方」を感じることを目的に、地域探索や登山、ピザ作り等、4つのグループに分かれて実施した。

(6) 外部講師による研修

① 盛岡大学短期大学部教授の嶋野重行氏から特別支援教育や障がい理解のための講座を6回に分けて実施した。学校以外の教師等も参加し、意見交流をもつことができた。

② いわて発達障害サポートセンターええ町作り隊代表の熊本葉一氏を招き、自閉スペクトラム症の理解と支援について学びを深めることができた。

3 外部研修

希望者が自主的に研修内容を選び参加した。研修後には研修報告書を作成し、全職員間に回覧した。

岩手県高等学校教育研究会規約 (令和5年4月1日 全部改正)

(名称・事務局)

第1条 本会は、岩手県高等学校教育研究会と称し、事務局を会長所在校に置く。

(目的・事業)

第2条 本会は、岩手県内の高等学校及び特別支援学校の教育振興のため研修することを目的とし、次の事業を行う。

1. 教科及び教育に関する調査研究
2. 前項についての成果の発表
3. 他の教育研究機関との連携
4. その他目的達成に必要な事項

(構成)

第3条 本会は、岩手県内の高等学校及び特別支援学校の校長並びに教員をもって構成され、学校単位に加盟を認める。

(役員)

第4条 本会に次の役員を置く。役員任期は2カ年とする。ただし再任を妨げない。補員の任期は前任者の残任期間とする。

1. 会長 1名：評議員会において選出する。本会を代表し、会務を統括する。
2. 副会長 2名：評議員会において選出する。会長を補佐し、会長不在の時は代理する。
3. 評議員 : 加盟校の校長全員とする。評議員会を組織し、重要事項を審議決定する。
4. 理事 : 部会長とする。部会の運営にあたる。
5. 監事 3名：評議員会で選任する。会計を監査する。

(会議)

第5条 本会は、以下の諸会議を持つ。いずれも3分の2以上の出席(委任状は出席と認める)で成立し、議決は出席者の過半数による。同数の場合は議長が決する。

1. 評議員会：本会の最高機関である。年2回会長が招集し、役員、事業、会計、その他の重要事項を決する。なお、会長は必要に応じ臨時に開催することができる。
2. 理事会：会長が必要により随時に招集することができる。
3. 監事はすべての会議に出席することができる。

(部会)

第6条 本会に次の部会を設け、部会長を置く。部会長は評議員から推薦し、評議員会で承認する。

- | | | | | | |
|----------|----------|----------|------------|----------|--------|
| (1)国語 | (2)地歴・公民 | (3)数学 | (4)理科 | (5)保健体育 | (6)音楽 |
| (7)美術・工芸 | (8)書道 | (9)英語 | (10)家庭・福祉 | (11)農業 | (12)工業 |
| (13)商業 | (14)水産 | (15)情報 | (16)特別支援教育 | (17)学校保健 | |
| (18)進路指導 | (19)図書館 | (20)生徒指導 | (21)教育相談 | (22)国際教育 | |

(経費・会計年度)

第7条 本会の経費は会費、その他の収入をもってあてる。本会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

(会計)

第8条 会計に関する規程は、別にこれを定める。

(改正)

第9条 規約の改正は、評議員会の議決による。

付則 本規約は、昭和40年4月1日から施行する。

| | |
|-----------|------|
| 昭和58年4月1日 | 一部改正 |
| 平成4年4月1日 | 一部改正 |
| 平成8年4月1日 | 一部改正 |
| 平成15年4月1日 | 一部改正 |
| 平成18年4月1日 | 一部改正 |
| 平成30年4月1日 | 一部改正 |
| 令和2年4月1日 | 一部改正 |
| 令和4年4月1日 | 一部改正 |
| 令和5年4月1日 | 全部改正 |

岩手県高等学校教育研究会 会計に関する規程 (令和6年4月1日 全部改正)

岩手県高等学校教育研究会規約第8条により、会計に関する規程を次のとおり定める。

第1条 会費の額は、評議員会で定める。

第2条 本会の加盟校は、自校の校長並びに教員(いずれも常勤の者)の人数分の会費を、評議員会が指定した期日までに納入する。

第3条 各部会の配分額は、評議員会で決める。

付則 事務執行細則を廃し、令和6年4月1日制定

令和6年度確認事項(令和6年5月14日 一部訂正)

(1) 全体的なこと

ア すべての会員の会費によって各部会が維持されることから、次の原則で公平性を保つ

- ・繰越金が多い部会の配分を減じて、全体の会費負担を適正にする
- ・各部会においては、年度を超えての積立、汎用物品等の購入、慶弔支出はおこなわない
- ・高校と特別支援学校では登録する教科の部会の数が異なることから、今年度の会費は、高校2,500円、特別支援学校1,500円とする

イ 非常勤など会費負担のない会員登録も可とする

ウ 今年度の各部会への配分額については次による

- ・配分の基準は、部会の直近の支出実質決算額に基づく
- ・繰越の多い部会については、配分の上限を設ける

繰越400万円超の部会 上限30万円

繰越100万円超の部会 上限50万円

エ 次年度の配分額と会費は、各部会の前年度決算報告等に基づき、第2回評議員会で提案する

オ 上部研究会の大会(東北大会・全国大会)などに備える会計(従来積立など)のあり方については検討課題とし、将来、必要に応じて「会計に関する規程」に追加する

(2) 加盟校関係

ア 会費を支出する会計は、教員(高教研会員)の会費負担のある会計による

(3) 部会関係

ア 研究会の要項、研究集録などの成果物のpdfは、本部事務局へも送付する

開催要項・成果物はすべての会員が参加・利用できるよう本部事務局がウェブ等で公開する

岩手県高等学校教育研究会特別支援教育部会規約

(名 称)

1 本部会は岩手県高等学校教育研究会特別支援教育部会と称し、事務局を部会長所属校に置く。

(目的及び事業)

2 本部会は特別支援教育の振興を目的とし、次の事業を行う。

- (1) 講演会の実施
- (2) 研究大会等派遣の支援
- (3) 研究集録等の発行

(会 員)

3 本部会の会員は次のとおり登録するものとする。

- (1) 特別支援学校に所属する校長および教職員は、本会に会員登録する。
- (2) 会員のうち、非常勤講師を除く教職員は岩手県高等学校教育研究会に会費を納める。

(役員等及び任務)

4 本部会に次の役員等を置く。

- (1) 部会長：会を代表し、会務を統括する。部会長の任期は3年とする。
- (2) 副部会長：部会長所属校の副校長が担当する。部会長を補佐し、部会長に事故あるときはこれを代行する。
- (3) 理 事：特別支援学校長を理事とし、本会の助言にあたる。
- (4) 監 査：部会長所属校の会員を監査とし、事務局会計を監査する。
- (5) 事務局員：部会長所属校から選出する。部会事務並びに会計にあたる。会計は予算書及び決算書を作成する。
- (6) 各校担当者：全ての特別支援学校に担当者を置く。

(会 議)

5 本部会に次の会議を設置する。

- (1) 総会：年1回部会長が招集する。必要に応じて臨時に招集することができる。
- (2) 理事会：必要に応じて部会長が招集する。

(会 計)

6 本部会の経費は、岩手県高等学校教育研究会からの配分金、その他をもってこれにあてる。

附則 本規約は、平成23年4月1日より施行する。

本規約は、平成31年4月1日より施行する。

本規約は、令和4年4月1日より施行する。

本規約は、令和6年4月1日より施行する。

本規約は、令和7年4月1日より施行する。

※部会長担当の順

| | | | | | | |
|-----|--------|-------|------|-----|------|-------|
| 年度 | H28～29 | 30～R2 | R3～5 | 6～8 | 9～11 | 12～14 |
| 部会長 | 久慈 | 気仙 | 釜石 | 宮古 | 久慈 | 気仙 |

————— 研究集録 第53卷 —————

発 行

令和8年3月11日 発 刊
岩手県高等学校教育研究会
特別支援教育部会

《事務局》

岩手県立宮古恵風支援学校

〒027-0097

岩手県宮古市崎山第5地割88

T E L (0193)63-0400 F A X (0193)64-3617